Special Section　The COVID-19 Pandemic and Gender

研究ノート

カラ・ウォーカーによる《フォンス・アメリカヌス》（2019）
――パンデミック下のイギリスにおけるBLM運動の視点から

内山尚子
（お茶の水女子大学）

新型コロナウイルス感染症の拡大とともに制度的人種差別の根深さが注目を集めBLM運動が展開する中、奴隷制や人種差別を容認する社会構造の一例として、一部の公共彫刻の見直しを求める声が欧米各地で上げられている。こうした中黒人女性芸術家カラ・ウォーカーがロンドンの《ヴィクトリア・メモリアル》へのクリティカルなトリビュートとして制作した《フォンス・アメリカヌス》（2019）は、時宜にかなった作例である。人種・奴隷制をめぐる美術史上の様々なイメージにリファレンスを付けることで、ウォーカーの作品は、ヒエラルキカルな人種表象とジェンダーのステレオタイプの形成が不可分に展開してきたこと、また、その錯綜した文化イメージが「帝国」の評価を形作ってきたことを示している。《フォンス・アメリカヌス》は、公共彫刻が伝え得ない帝国主義の暴力と恐怖、そして悲しみを観賞者に喚起し、歴史の語りを問い直すための視点を提供するのである。

キーワード
BLM運動、公共彫刻、カラ・ウォーカー、《フォンス・アメリカヌス》、《ヴィクトリア・メモリアル》

Ⅰ．はじめに

新型コロナウイルス感染症が世界的な公衆衛生の危機を招く中、マイノリティの人々が置かれた立場の脆弱性が改めて注目を集めている。例えば、英米の感染状況のデータを分析したある研究は、黒人およびアジア系の人々は白人に比べ新型コロナウイルス感染症を罹患するリスクが高いと発表した（Sze et. al. 2020）。要因は複合的だが、エッセンシャル・ワーカーに占める割合の高いBAME（Black, Asian and Minority Ethnic）の人々は、罹患の恐れとも隣り合わせである（Sze et. al. 2020）。こうした中、2020年5月25日にアメリカ合衆国（以下、アメリカ）のミネソタ州ミネアポリスで黒人男性ジョージ・フロイドが警察による尋問中に殺害された事件は、人種差別がウイルス同様マイノリティの人々の生命を脅かしてきた事実を再認識させ、

DOI：10.24567/0002000109

2013年に始まったブラック・ライヴズ・マター（BLM）運動が活発化するきっかけとなった。特に注目されたのは制度的人種差別で、個々人の善悪の判断を超えて差別や不利益を再生産する社会構造が浮き彫りになった。公衆衛生も無関係でなく（Sze et. al. 2020）、イギリスでは、新型コロナウイルスのワクチンに不信感を抱く人の割合が、歴史的に治験の実施状況に偏りのあるBAMEコミュニティ、特に黒人の人々の間で著しく高いことが、健康格差を広げる要因として懸念されている（Geddes 2020; Parveen et. al. 2021）。

美術の領域においても、「人種」が作品の制作や内容・受容に与える影響を検討するクリティカル・レース・アート・ヒストリー研究（Holloway 2016）が、「人種」概念の形成における美術の責任、また、既存の価値観を問い直す美術実践の展開について検証を進めている。本稿もこの立場から、アメリカの黒人芸術家カラ・ウォーカー（b. 1969）による《フォンス・アメリカヌス》（2019）を紹介する。特に、イギリスにおいて本作が展示されていた2020年にBLM運動が展開したことを踏まえ[1]、公共彫刻をめぐる今日の議論における作品の意味を考察していきたい。

Ⅱ．BLM運動下のイギリスにおける彫像撤去の動き

2020年、人種差別に反対する連帯意識からBLM運動が世界へ拡大する中、差別を再生産する社会構造の一例として公共彫刻には厳しい目が向けられた。アメリカではコロンブスや南軍軍人の像、欧州では奴隷制や帝国主義と関わりの深い人物像の撤去を求める声が若者を中心に高まり、イギリスのブリストルでは6月7日に《エドワード・コルストン像》（1895）が引き倒され湾に沈められた。貿易商であったコルストン（1636-1721）は保守党国会議員や慈善家としても知られ、名を冠した劇場や通りも多いが、奴隷貿易で有名なロイヤル・アフリカン・カンパニーの重鎮として財を成したことや議員時代に奴隷売買を容認したことが問題視される[2]。ロンドンのパーリアメント・スクエアでも、《ウィンストン・チャーチル像》（1973）の台座に刻まれたチャーチルの名前の下に、「はレイシストだった」というグラフィティが書き込まれた。さらに、「タップル・ザ・レイシスト」というクラウドソース・マップでは、「コロニアルな暴力に責任を負う」人物の像や建物の名称等のリストアップが進められていった。

こうした声に応答し、オックスフォード

1　2019年10月2日に始まった《フォンス・アメリカヌス》の展示は、新型コロナウイルス感染症の拡大により会場であるテート・モダンが一時休館したことに伴い、2021年2月7日まで会期を延長した。しかし同館は2020年12月より再度休館に入り、ウォーカーの作品の展示も終了することとなった。

2　像は数日後に引き上げられ博物館での展示が検討されている。なお、価値観の転換に伴う公共彫刻の撤去は歴史的に珍しいものではなく、*Art under Attack*展（Tate Britain, 2013-2014）等受容史研究において広義のイコノクラスムの一例として注目されている。

大学オリエル・カレッジは《セシル・ローズ像》（1911）の撤去を決め[3]、ロンドンのタワー・ハムレット自治区も《ロバート・ミリガン像》（1813）を撤去した。さらにロンドン市長サディク・カーンは、市内の公共彫刻や建築等が「多様性」という同市の価値観を反映しているか見直すと発表し、スコットランド議会やマンチェスター、カーディフ市も同様の検証を進めている。

一方、一部の政治家はこれに慎重な姿勢を示している。英首相ボリス・ジョンソンはSNSで、「我々は今過去の編集や検閲を試みることはできない」と述べ、像の撤去は「歴史に嘘をつくことであり、次世代の教育の質を低下させる」と続けた（Johnson 2020）。デジタル・文化・メディア・スポーツ庁大臣オリバー・ダウデンも、都市景観の変更には「民主主義的プロセス」が必要であると述べ（Parveen 2020）、美術館等公的文化機関にも「偏ることなく」行動すべきであると記した書簡を送付した（Hicks 2020）。

書簡は年度予算見直しの際に各施設の対応を考慮すると示唆するもので、アームズ・レングスの原則を脅かす発言として問題視された（Hicks 2020）。例えば現代考古学者ダン・ヒックス（Dan Hicks）は、キュレーションは民主主義的活動であり、出資者だけでなくコミュニティや来館者に基づいてその正当性は判断されると述べる（Hicks 2020）。加えて、歴史は常に歴史の書き直しであり、「中立」を求めることは、彫像撤去に反対する意見を、差別を助長する制度的構造の見直しと対立させることに他ならないと述べ、こうした「偽の文化戦争」は退ける必要があると指摘する（Hicks 2020）。さらに、彫像をめぐり拡大する分断は、「帝国」の過去との対峙から目を逸させ、ブレグジットを支えたレトリックでもあるイギリスの「偉大さ」の盲目的称賛を容認しかねないとも指摘される（Kettle 2020）。例えばブリストルの像の場合、建設時に奴隷制は既に廃止されていたが、帝国主義を推し進めるヴィクトリア朝の当時評価されたのは慈善家としてのコルストンの業績であり、奴隷制で利益を得た事実は問題視されなかった（Kettle 2020）。今日公共彫刻は、その人物の行いや属性だけでなく、それを制作し設置した時代の文脈に照らして再検討することが求められている。

Ⅲ．カラ・ウォーカー《フォンス・アメリカヌス》

こうした2020年の出来事に先駆けて、カラ・ウォーカーは2019年、テートのヒュンダイ・コミッションのために《フォンス・アメリカヌス》（図）を制作した[4]。これは、ヴィクトリア女王の死後その功績を称えるため彫刻家トーマス・ブロックがバッキンガム宮殿前に制作した《ヴィクトリア・メモリアル》（1911年除幕）に着想を得た作品だが、過去を讃える公共彫刻のあり方を

3　2021年2月初稿完成時。同カレッジは2021年5月、制度的経済的状況に鑑み現時点では撤去に向けた法的プロセスは開始しないと発表した。

4　ヒュンダイは韓国の大手自動車メーカー。テートとのパートナーシップに基づき、国際的に活躍する芸術家に、毎年、テート・モダンのタービン・ホールに設置する作品の制作を依頼している。

問い直すインスタレーションであり、英米で彫像撤去運動が活発化する現状に照らすととりわけ意義深いものである(Anon. Not dated)。

テート・モダンのタービン・ホールに設置された《フォンス・アメリカヌス》は、《ヴィクトリア・メモリアル》同様、頂上の人物像を中心に同心円状に広がる構造を持つ。しかし、後者が頂上の「勝利」とその下に控える「忠誠」と「勇敢さ」、中段のヴィクトリア女王像から時計回りに配された「真実」「母性」「正義」の寓意像で構成される一方、《フォンス・アメリカヌス》には奴隷制や人種差別に関連するイメージが散りばめられている。例えば、女王の位置にある船長服の男性座像は、ハイチにおける奴隷制廃止と独立運動の立役者トゥーサン・ルーヴェルチュール、汎アフリカニズム運動の指導者マーカス・ガーベイ、アメリカの奴隷制度廃止論者でシエラレオネの自由黒人コロニーの建設に尽力したポール・カフ、ユージーン・オニールの戯曲に登場するアフリカ系アメリカ人のジョーンズ皇帝等、白人の支配に抵抗する複数のモデルを融合した存在である(Kim 2019: 113)。この男性像の右手にはリンチを象徴する木の枝から下がる首吊りのロープが表され、「ジム・クロウ法」下のアメリカ南部で「白人女性を守ること」を口実に多くの黒人の人々の命が失われてきたことを想起させる。時計回りにさらに進むと、ポール・ゴーギャンの《果物を持つ女性》(1893)のようにむき出しの胸にココナッツの実を抱き、足元にメランコリーの寓意像を抱える黒人女性(「ヴィッキー女王」)、そして、跪き許しを乞う奴隷商人が、いずれもカリカチュア化された姿で表されている。

二重になった下層の水盤には、ハバナ湾におけるサメの襲撃を描いたジョン・シングルトン・コプリーの《ワトソンとサメ》(1778)、イギリスの奴隷船が奴隷を海に落として殺害し補償金を得ようとした事件に基づく J. M. W. ターナー の《奴隷船》(1840)、壊れた船でサメに囲まれながらカリブ海を彷徨う黒人男性を描いたウィンズロー・ホーマーの《メキシコ湾流》(1899)等、人種と海難事故を題材とした作品に基づくモティーフが配される(Kim 2019: 114)。また、全身に穴を穿たれた人を抱きかかえる人物像は、1955 年に「白人女性に不快感を与えた」ためリンチを受け、殴られ銃弾で撃たれ川に沈められたアメリカの黒人少年エメット・ティルの遺体が引き上げられる場面を表している(Kim 2019: 115)。

作品頂上の「勝利」の位置で両手を広げ半裸で身を大きく逸らすのは、乳母でアフロ・ブラジリアン/カリビアンの巫女「海洋の娘(the daughter of waters)」で、彼女は、帝国主義のイデオロギーに基づく黒人女性像を刷新する存在である(Anon. Not dated)。置き換えられたもののひとつに、『西インド諸島におけるイギリス植民地の歴史、人々と通商』(ブライアン・エドワーズ著、1801 年版)の扉絵にトーマス・ストタードが描いた「黒いヴィーナス」がある(Anon. Not dated)。エドワーズの著作は経済的恩恵を根拠にイギリスの奴隷制を正当化する内容で、ストタードの版画は(白人男性による黒人女性の)「性的な支配を通してアフリカの美しさを賞賛す

る（とともに貶す）」アイザック・ティールの「黒いヴィーナス：頌歌」（1793）に基づくものであったため、「黒いヴィーナス」は「黒人身体の侵略の正当化を通して帝国の支配を神話化」するイメージであった（Kim 2019: 118-109）[5]。一方、ウォーカー自身が「ブラック・アトランティックの寓意」と呼ぶ本作では（Anon. Not dated）、上記の通り奴隷制や人種差別による様々な苦しみを関連づける要素として「水」が用いられている。「ブラック・アトランティック」は奴隷貿易以来の大西洋を介したトランスナショナルな往来に一国史では捉えきれない「黒人文化」の背景と展開を求める概念であり（Gilroy 1993=2006）、噴水である本作（「フォンス」はラテン語で「泉」の意）では、「海洋の娘」の母乳と首筋の傷から迸る血が、その「水」の正体として表現されているのである。

展示を企画したクララ・キム（Clara Kim）は、「海洋の娘」の母乳と血液とを「ブラック・アトランティックに生を与える『羊水』」（Kim 2019: 113）と呼ぶ。しかし、「羊水」という言葉は、女性表象を考える上で避けて通れない「母性」を想起させるものでもある。《ヴィクトリア・メモリアル》にも「母性」の寓意像があるが、これは「妻／母親」としての女王のイメージがヴィクトリア朝の男性を中心としたミドルクラスの家族観を支えたこと（井野瀬 2017: 228）、そしてインドの君主を兼ねて以来彼女が「帝国の母」と呼ばれたこと（井野瀬 2017: 219）を思い起こさせる。家庭的なイメージを戦略的に用いることで、ヴィクトリア女王は君主制への批判から逃れて「慈悲深い救済者」としてのイギリスの「偉大さ」を強調した（井野瀬 2017）。ウォーカーは人種やジェンダーのステレオタイプなイメージを用いることで差別を助長すると批判されることもあるが、戸惑いを与えるほどに強調されたイメージは、良し悪しの安易な判断を退けるが故に鑑賞者をより深く問題に向き合わせるという評価もある（Wickham 2015）。本質主義的な性役割の議論に還元されかねない「母性」というテーマが、高さ13メートルの作品の頂上で表情さえ確認できないほど身を捩った「海洋の娘」によって肯定されているのか批判されているのか、そもそも示唆されているのかさえ鑑賞者の位置からは判断し難い。ヘゲモニックな表象において否応なく女性に結び付けられてきた属性を喚起しているようでありながら、ここでもウォーカーの作品は、摑み難さによって我々にその認識を問い直し続けさせているのではないだろうか。

Ⅳ．おわりに

博物館倫理学では、「ラディカル・トランスパレンシー」という概念の下、現在の基準では「問題のある」資料を、隠蔽するのでも展示を正当化するのでもなく、何が問題か議論するための情報と共に提示する必要性が説かれている（Marstine 2011）。ブリティッシュ・ミュージアムは2020年8月に創設者

5　「黒いヴィーナス」が立つ貝殻のモティーフは、噴水から離れてホール内に置かれたインスタレーションの一部（グロット部分）に引用されている。しかしその中から覗くのは、涙を流す黒人少年の頭部である。

ハンス・スローン卿の胸像を「帝国と奴隷制の遺産」という展示ケースに納めた。帝国主義の遺産を色濃く伝えるコレクションを核とした施設ではあるが、これはBLM運動が提起した問題への応答である。一方、台座に奴隷貿易との関係性を記すことが2018年に決定したものの、内容を巡ってカウンシル内で議論がまとまらなかったブリストルの《コルストン像》は、公共彫刻における同種の実践の難しさを示している。

ウォーカーの作品は、こうした公共彫刻へのひとつのアプローチと見ることができるだろう。イギリスの奴隷制とその遺産に対する理解不足（テートの創設者が砂糖貿易で財を成したことへの無批判な姿勢）への批判もあったが（Parker 2020）、2019年10月の公開以降《フォンス・アメリカヌス》は概ね高く評価され、美術批評家スー・ハバード（Sue Hubbard）の以下の言葉が示すように、2020年にはBLM運動の拡大により一層注目を集めた。

> それ（訳注：《フォンス・アメリカヌス》）は、学術的分析に値する「過去」としての「歴史」に関する「単なる」所見ではなく、人種差別が、崩壊した帝国の忌まわしい犯罪であるのみならず風土病であり続けていることを我々に受け止めさせる美術作品となるのである（Hubbard 2020）。

帝国の繁栄を回顧する《ヴィクトリア・メモリアル》に関連づけることで、ウォーカーの作品は、その歴史解釈を成立させる価値観の陰で今日まで続いている人種差別の問題に我々の注意を喚起した。さらに作品のモティーフは、ヒエラルキカルな「人種」の表象にしばしば「女性」に対する眼差しが介在することで差別と支配が正当化されてきたことをも顕にした。BLMはインターセクショナリティへの意識に根ざした運動だが、その議論や報道からはジェンダーやセクシュアリティの視点が抜け落ちることが問題視される（川坂 2020: 58）。ウォーカーの作品は数世紀にわたるイメージの蓄積にリファレンスをつけることで、人種的「他者」への眼差しがジェンダーのそれと絡まり合いながら特定のイデオロギーを支えてきた歴史を浮き彫りにしているのである。

参考文献

Anon., Not dated, “Look Closer: Kara Walker’s Fons Americanus”, Tate,（2021年1月15日取得, https://www.tate.org.uk/art/artists/kara-walker-2674/kara-walkers-fons-americanus）.

Geddes, Linda, 2021, “Covid Vaccine: 72% of Black People Unlikely to Have Jab, UK Survey Finds”, *The Guardian*, January 16,（2021年1月16日 取得, https://www.theguardian.com/world/2021/jan/16/covid-vaccine-black-people-unlikely-covid-jab-uk）.

Gilroy, Paul, 1993. *The Black Atlantic: Modernity and Double-Consciousness*, Harvard University Press.（上野俊哉他訳，2006，『ブラック・アトランティック：近代性と二重意識』, 月曜社）.

Hicks, Dan, 2020, “The UK Government is Trying to Draw Museums into a Fake Culture War”, *The Guardian*, October 15,（2021年1月12日取得, https://www.theguardian.com/commentisfree/2020/oct/15/the-

uk-government-is-trying-to-draw-museums-into-a-fake-culture-war）.
Holloway, Camara Dia, 2016, “Critical Race Art History”, *Art Journal*, 75 (1): pp. 89-92.
Hubbard, Sue, 2020, “Kara Walker: Fons Americanus-Significant Works”, *Artlyst*, July 5,（2020 年 12 月 21 日　取得, https://www.artlyst.com/features/kara-walker-fons-americanus-significant-works-sue-hubbard/）.
井野瀬久美惠，2017，『興亡の世界史　大英帝国という経験』，講談社（学術文庫）.
Johnson, Boris, 2020, Tweets on the statue of Winston Churchill, *Twitter*, June 12,（2021 年 1 月 12 日取得, https://twitter.com/BorisJohnson/status/1271388180193914880）.
川坂和義，2020，「全ての人が自由になるまで誰も自由にはなれない：クィアムーブメントと人種とジェンダー・セクシュアリティの交差」『現代思想』（青土社），48 巻13号：pp. 58-81.
Kettle, Martin, 2020, “Fighting over Statues Obscures the Real Problem: Britain’s Delusion about its Past”, *The Guardian*, June 11,（2021 年 1 月 12 日取得, https://www.theguardian.com/commentisfree/2020/jun/11/obsessing-over-statues-obscures-the-real-problem-britains-delusion-about-its-past）.
Kim, Clara, 2019, “An Allegory of the Black Atlantic”, In Clara Kim ed., *Kara Walker: Fons Americanus,* exh. cat., London, Tate Publishing: pp. 104-120.
Marstine, Janet, 2011, “The Contingent Nature of the New Museum Ethics”, In Janet Marstine ed., *The Routledge Companion to Museum Ethics: Redefining Ethics for the Twenty-First Century Museum*, London, Routledge: pp. 3-25.
Parker, Rianna Jade, 2020, “With Her Monumental Fountain in London, Kara Walker Offers a Gift We Shouldn’t Accept”, *ARTnews*, February 26,（2020 年 12 月 17 日　取得, https://www.artnews.com/art-news/reviews/kara-walker-tate-modern-fons-americanus-1202678828/）.
Parveen, Nazia, 2020, “UK Government Seems to Rule Out Removal of Controversial Statues”, *The Guardian*, June 13,（2021 年 1 月 12 日 取得, https://www.theguardian.com/politics/2020/jun/13/removal-of-controversial-statues-winston-churchill-protest）.
Parveen, Nazia, et al., 2021, “Call to Prioritise Minority Ethnic Groups for Covid Vaccines”, *The Guardian*, January 18,（2021 年 2 月 2 日取得, https://www.theguardian.com/world/2021/jan/18/call-to-prioritise-minority-ethnic-groups-for-covid-vaccines）.
Sze, Shirley, et al., 2020, “Ethnicity and Clinical Outcomes in Covid-19: A Systematic

図　カラ・ウォーカー（Kara Walker）《フォンス・アメリカヌス（*Fons Americanus*）》（部分），2019，素材：非毒性アクリルとセメントの合成物，再生可能なコルク，木材，金属，サイズ：主要部分：22.4 × 15.2 × 13.2 メートル，グロット部分：3.1 × 3.2 × 3.3 メートル © Kara Walker, courtesy of Sikkema Jenkins & Co., New York. Photograph © Tate

Review and Meta-Analysis", *EClinicalMedicine*, （2020 年 12 月 17 日　取得, https://doi.org/10.1016/j.eclinm.2020.100630）.

Wickham, Kim, 2015, "'I Undo You, Master': Uncomfortable Encounters in the Work of Kara Walker", *The Comparatist*, vol. 39: pp. 335-354.

（掲載決定日：2021 年 5 月 14 日）

Abstract

A Review of Kara Walker's *Fons Americanus* from the Standpoint of the UK's Black Lives Matter Movement during the COVID-19 Pandemic

Naoko UCHIYAMA

The awareness of institutional racism witnessed an increase in 2020 during the ongoing COVID-19 pandemic. As the Black Lives Matter movement developed, public monuments connected to a past of slavery and racism attracted particular criticism in the UK, as in other Euro-American countries. Kara Walker's *Fons Americanus* (2019) represents a critical tribute to *Victoria Memorial* in The Mall in London and is perfectly apt for the current debate about the ways in which controversial statues can be re-evaluated in contemporary societies. Walker's installation references numerous images of race and slavery across centuries of art history to reveal that gender stereotypes were often perpetuated according to racial hierarchies and that such complex cultural images contributed to the evaluation of the empire. *Fons Americanus* offers a perspective through which readers can question received narratives of history by acknowledging the violence, terrors, and sorrows of imperialism that are not necessarily addressed by public monuments.

Keywords
BLM movement, public monument, Kara Walker, *Fons Americanus*, *Victoria Memorial*